

根付研究 最前線 「留具の歴史は担い手との歴史」

留具の発生をめぐる蓋然的ないし偶発的な要因を探るために、筆者が着目したのが留具の佩用者、つまり担い手です。もちろん、あるモノが生まれてくる際、利便性に於いてこれを解くことは非常に説得力があります。いわゆる「袋物の着脱に便利だったから留具が生まれた」というものです。しかしここで留意しなければならないのは、この利便性が当時にも於いてもそう考えられていたかという点です。事実、第8号で概観したように、室町時代(1336年～1573年)中頃までに描かれた絵画史料では、袋物の佩用は、腰刀の鞘に袋物を紐で吊すか、または丸腰に吊すものでした。これに従えば、袋物を佩用するのに当時便利だったのは、<直にからげるとのことだったようです。こう考えれば、筆致によって判断の難しいところではありますが、留具が描かれていないことにも説明がつくように思われます。また、あるモノが、広く用いられるためには、何者かがその価値(それ自体)に共感するか、または何らかの新たな価値をそこに見出さねばなりません。つまり、ある担い手の介在なくして留具の発生はありえないということです。留具と、それに連なる根付の発生・成立を、火打石を入れる火打袋や葉入れである印籠といった特定の提物との関係性で解こうとしても、担い手

の嗜好性や社会性を明らかにしない限り、それは事象の単なる説明であって、それが発生・成立した理由には不十分だと言えるでしょう。換言すれば、留具の発生は、モノとモノの関係性からではなく、留具と留具の担い手との関係性の中でしか明らかにならない、と筆者は考えています。少し時代が下り、慶長期に描かれた桃山時代の風俗を伝える『洛中洛外図(舟木家本)』には、この担い手の手掛かりと留具発生の謎が見え隠れしています。とりわけ、袋物の佩用位置が右腰にあること、これがこの謎を解くカギになると考えられます。



公益財団法人 京都 清宗根付館 学芸員 大西 弘祐(忠雲)

<画像>
岩佐又兵衛『洛中風俗図屏風』東京国立博物館蔵 桃山時代_17世紀
画像番号C0007119 陳列番号A-11168
東京国立博物館 研究情報アーカイブズ (tnm.jp)
https://webarchives.tnm.jp
*上のデジタル画像のうち、袋物の佩用が分かるよう画像の一部を拡大した。

作家の視点 『伊藤 滋女』

伊藤滋女氏は小動物の題材を得意にしている作家で、その作品には擬人化された動物たちが繰り広げる寓話の世界が広がります。主人公の動物たちが感情を持って表情豊かに話しかけてくるのが特徴です。仏像彫刻、木彫り講師などを経て、根付の細密彫刻の素晴らしさに心惹かれて根付作家の道に進んだ滋女氏が考える根付の魅力を紹介しします。

「どんな根付が作れるか、それを想像しているだけで一日が過ぎていきます。実際は今の技量と相談しながらの制作ですが、頭の中ではありとあらゆる物を根付の形にして遊んでいます。」

まず大切にしているのは「可愛らしさ」で、心動かされる素直な興味を表現にしているといいます。小動物は全体的な丸みが出やすく根付の形状にもまとめやすいので、そこに彼女ならではの物語を加えます。彼女の作品で共通するのは「優しさ」と「癒やし」を見るものに与えることです。顔の向きや表情、目の位置、口元などは1ミリ違えば全く印象が変わるので、ひと彫りひと彫り丁寧に進め「微笑み」にまとめています。



「ナキウサギ」高4.0cm

「言葉がなくても話かけてくるような、時にはじっくり話を聞いてくれるような根付を作りたいと思っています。」

滋女氏は根付の中に「出来事」を持ち込み、時間の経緯を見るものに想像させます。主人公の動物たちによって、ある結果をひき起こしたり、ある問題を解決したりする構造は、などなどと同様な効果を持ち、面白味や不可解な印象で鑑賞者の興味をひき、作品の解釈をするように誘います。そうした謎解きのストーリーの対話を楽しむのも滋女氏の作品の魅力です。



伊藤 滋女 (いとうしげじょ)

1996年仏師・櫻井琮山氏に師事し仏像彫刻を始め、2001年に山田洋治氏より根付の指導を受け、根付制作に取り組む。素材は黄楊を得意にしている。

2022年 10月～12月の特別企画展のご案内

10月「躍動する根付」展 ■ 10月1日(土)～30日(日)	11月「秋の名品」展 ■ 11月1日(火)～30日(水)	12月「酒にまつわる根付」展 ■ 12月1日(木)～29日(木)
-----------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter, Instagramにて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞(奈良県大和郡山市より授与) 家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

公式サイトはこちらから▶

コロナウイルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して

- ・入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします(37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせていただきます)。
- ・万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
- ・マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

公益財団法人 京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社代表取締役会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね(宗)とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。



SUMMER ~AUTUMN Issue. 09

[目次]

- 企画展のご案内
- 企画展の見所
- 根付研究最前線
- 作家の視点

[発行元]

公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生 賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

生命の息吹を感じる巧みの技法園『生命を感じる』展

根付の題材は多岐にわたり、地球上のあらゆるものを表現しています。地球は太陽系の惑星で唯一、多様な生命が存在する天体です。今回は地球の生命に焦点を当てて、海の生物、陸の生物や植物など、さまざまな生命の輝きを紹介いたします。地球は今から 46 億年前に惑星同士が衝突して形成されました。灼熱のマグマが長い時間をかけて次第に冷えて海となりました。過酷な環境を克服しながら 35 億年前の海に誕生したバクテリア生物を祖にして生命をめぐる長い旅が始まりました。その後生物は絶滅と進化を繰り返し、いくつもの奇跡が重なった

結果、現在では 870 万種といわれる多種多様な生態系をもたらしました。すべての存在には意味と使命があり、共生し連鎖しているなかで私たちは生かされていると誰しも感じるところです。それはまさに、今回のテーマである「生命を感じて」そのものです。身近なものに目を向け、生き生きとした描写で彫り上げる作家たちの姿勢は生命賛歌に通じます。本展では根付の樂園に暮らす、かけがえのない生命の営みを水族館、動物園、植物園に合わせて紹介いたします。

七月の企画展 水中に広がる神秘を求めて

「根付水族館」
7月1日(金)～31日(日)

生命の息吹を感じる巧みの技法園

生命を感じる展

八月の企画展 珍しい動物たちのユーモラスな世界

「根付動物園」
8月2日(火)～31日(水)

九月の企画展 四季折々の草花に癒されるひと時

「根付植物園」
9月1日(木)～30日(金)

京都 清宗根付館 KYOTO SEISHU NETSUKU ART MUSEUM

告知ポスター

7月 水中に広がる神秘を求めて ■7月1日(金)～31日(日)

「根付水族館」

海は全ての生物のみなもとであり、共通の祖先から枝分かれしたふるさとでもあります。海からの水蒸気は雲を起し、雨は山野に降りそそぎ、泉は川となり、また海に戻っていく循環によって、さまざまな生命を育んできました。地球の表面積の約70%を占める海は多様な生物の宝庫で、いまだ到達できない深海には未知の生物が発見されるのを待っているかもしれません。人智を超えた海の世界に畏敬の念を抱き、浪漫を掻き立ててきました。

湧き上がる泉、ほとばしる急流、静かな池、光の射さぬ海底、一流の根付作家たちは世界のあらゆる場所から生き物たちを掬い上げ、この根付館に泳がせます。

8月 珍しい動物たちのユーモラスな世界 ■8月2日(火)～31日(水)

「根付動物園」

根付では動物を主題にした作品が最も多く、身近な動物から、十二支や説話に登場する動物、縁起の良い動物などまで好まれました。江戸時代中期に自分の干支を彫った根付を持つと幸運が舞い込むといった風習が起り、一気に需要が増えました。現在では世界のあらゆる動物たちを題材にした作品へと広がりを見せています。

今、私たちと暮らしている動物たちや、すでに滅んでしまった動物たち、遠くで今まさに滅んでいこうとしている動物たち、まだ見ぬ動物たちや、私たちの心の中に住んでいる動物たち、ここはそんな動物たちが自由に遊ぶ動物園です。

9月 四季折々の草花に癒されるひと時 ■9月1日(木)～30日(金)

「根付植物園」

日本の気候は温暖で、四季折々の美しさがあります。日本人は風物を詩歌や絵画に表し、花鳥風月を大事にしてきました。自然のうつろいや不完全さに「もののあはれ」を感じ、しみじみとした情趣を我が身に引き寄せて、自然に奥深い世界を見出してきました。

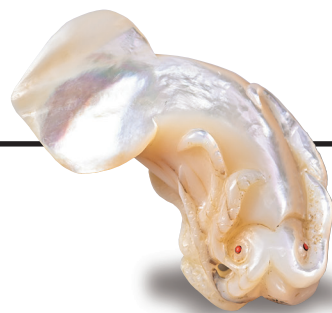
また花を髪や冠に挿さずし(挿頭)は自然の持つ霊力や植物の生命力を身に着けようとしたのが始まりとされますが、花々を見て癒されるのもそうした力と共鳴するからかもしれません。

根付でも花や植物などで季節感を表現したり、作者の心情を託したりしています。咲き誇る根付の花々をお楽しみください。



高木 喜峰(1957～)
「流水の天使」 高3.8cm
エゾシカ角

寒冷な海域に棲息するクリオネは、一対の翼足で羽ばたくように泳ぐことから天使の羽に例えられる。



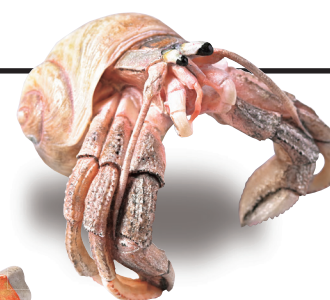
多々羅 幽山(1947～)
「いかにも!」 高1.7cm
白蝶貝

マザーオブパール(白蝶貝)の厚い真珠層のイリデッセンス(構造色)の強い光沢はイカにも!



桜井 英之(1941～)
「飾り魚」 高2.5cm
鹿角

深海魚を思わせるエキゾチックな色使いと図案化された文様が特徴の作品。鹿角の形状を活かしている。



奥田 浩堂(1940～)
「宿蟹」 高3.4cm
象牙

巻貝を背負った姿がユーモラスなヤドカリ。沖縄の八重山諸島ではヤドカリを人間の起源とみなす神話も残る。



及川 空観(1968～)
「如意」思いのまま泳ぎまわる」 高3.8cm
朝熊黄楊・琥珀・瑪瑙・鹿角

遊泳している金魚に、「思いのまま」に泳ぐ自由な解放感を重ねた作品。



河原 明秀(1934～2016)
「ヒョウ」 高3.9cm
黄楊・べっ甲

獲物に忍び寄るヒョウの様子を作品に。ヒョウの美しい斑紋はすべてべっ甲の象嵌で表している。



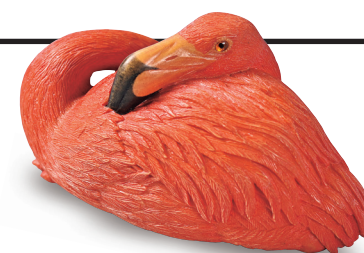
小野里 三味(1967～)
「ハシビロコウ」 高7.5cm
象牙

「動かない鳥」として有名なハシビロコウ。現在国内で13羽だけ飼育されている貴重な鳥を題材にした作品。



スーザン・レイト(1955～)
「サル」 高4.9cm
黄楊

人間に最も近いサルといわれるチンパンジー。オーストラリア在住で宝石職人でもある作家による作品。



ニック・ラム(1948～)
「オオフラミンゴ」 高3.0cm
黄楊

ラテン語で炎という意味の「フラミンゴ」は幸運のシンボルとされる鳥。米国在住の作家による作品。



沢井 向円(1950～)
「母子」 高4.7cm
黄楊

「森の人」を意味するオランウータンは絶滅が危ぶまれる。作者の憂いを母子への愛情に託している。



小林 成山(1926～)
「秋の七草」 高2.8cm
象牙

山上憶良が秋に咲く七種の花の美しさを歌で称えた「秋の七草」。秋の情趣を柳差根付で表現している。



村松 親月(1934～)
「ほおずき」 高3.1cm
象牙

夏の終わりに真っ赤に変色する「ほおずき」。象牙を天然草木だけで染色して色合いを再現している。



中畑 泰成(1953～)
「あけび」 高3.9cm
黄楊・黒蝶貝

秋の味覚のひとつ「あけび」は熟すと皮が縦に割れて白い果実が顔をのぞかせる。果実を黒蝶貝で象嵌。



針谷 祐之(1954～)
「紫陽花に蜻蛉」 高4.2cm
花梨・漆・卵殻・貝

酒井抱一筆の花鳥十二か月図から翻案した時絵作品。紫陽花の中で色合いを変え時間の経過も表す。



弓削 祥陽(1947～)
「晩夏」 高4.0cm
黄楊・漆

彩漆を巧みに使い、晩夏に実をつける椿を写実的に表現。実のそばに新芽を添えて自然の循環を象徴。